

山と宗教 (前編)

日本山岳修験学会顧問
長野 覺

1. 諸信仰を受容した日本の山

日本国内で山を視界に収めない地域は存在しない。国土面積の72.8%は山地・丘陵である(国土交通省調べ)。古来、日本人は風土形成の過程で、山は神の降臨する聖地(神道)、祖霊の往く他界(民俗信仰)、不老長寿の神仙境(道教)、仏・菩薩の浄土(仏教)、山中胎内観(修験道)など、さまざまな信仰を託して来た。その信仰に教祖・教典・儀礼などが定まれば宗教となる(図1)。

現実に日本の山は、生活・生業に不可欠な水源であり、薪炭・建材の供給、金銀銅など貴金属の産出、山にかかる雲や残雪形が教える生活暦など、山の恵みに感謝して崇拝した。その一方で山は通行を妨げる険阻で複雑な地形、見通しの利かない鬱蒼たる森林、荒涼とした植生のない厳しい寒気、火山活動や土石流などの恐怖から、地獄の存在も連想された。

また明治維新前は、赤不浄や醜女とされる山神の嫉妬説などから女人禁制の山が全国各地にあり、奈良県の大峰山(山上ヶ岳)は現在も厳守している。里や巷のおのみねさんに神体山・霊山とみなされた山は、精進潔斎

して心身を浄化しなければ登頂できない異界の聖地であり、また聖なる山へ登ることで心身も浄化された。

日本人にとっては、“そこに山があるから登る”という近代アルピニズムの山岳観は明治以降に受容した思想と行動であり、3世紀の魏志倭人伝も記す山島に依った倭国の人びとの山岳観は、歴史過程の中で異なる信仰・宗教を排斥することなく受け入れ、山に留めて現代まで継承している。大峰山、富士山、屋久島、日光(男体山)、巖島(いつくしま みせん 弥山)などが世界遺産に認定されたように、日本人の伝統的な山岳観、その信仰によって守護された自然や山岳宗教文化は、国際的にも注目され始めている。8月11日を日本の祝日「山の日」とした契機に、自然保護と深く係わった日本人の伝統的な山の宗教観を、改めて見直したい。

2. 山の宗教史

実に1万有余年前の縄文時代から近現代に及ぶまで、山では狩猟・採集を山神の恵みとして生活した山人が散在し、原初的宗教の系譜とされる自然・精霊・呪術(巫呪)信仰などが継承された(以下図1参照)。弥生時代(紀元前5世紀～紀元後3世紀)に水田が開

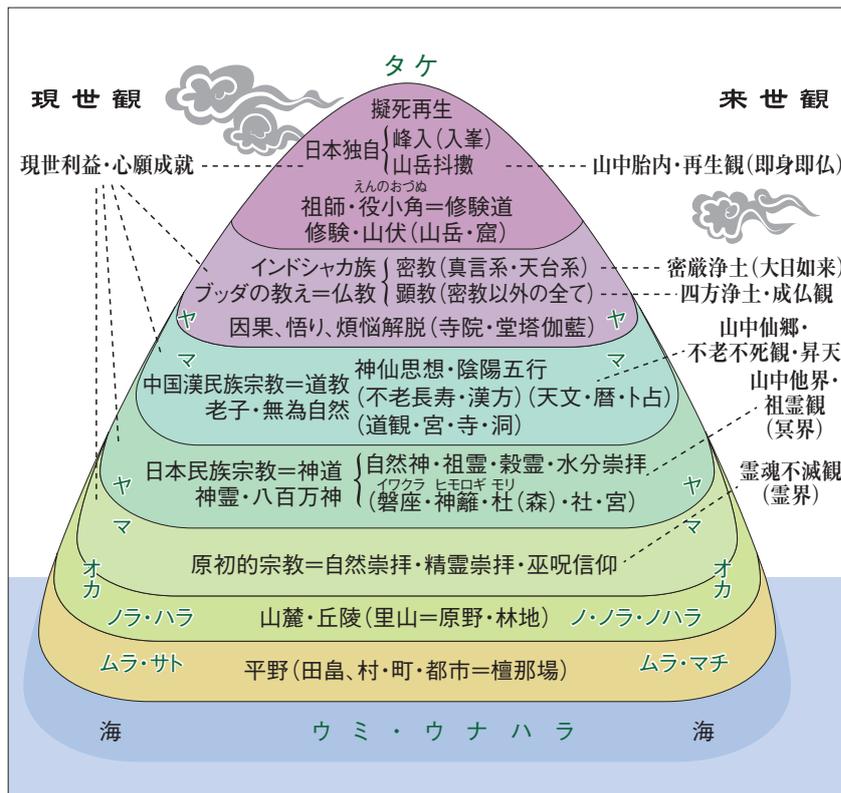


図1 諸信仰を習合した修験道の山(原図：長野覺)

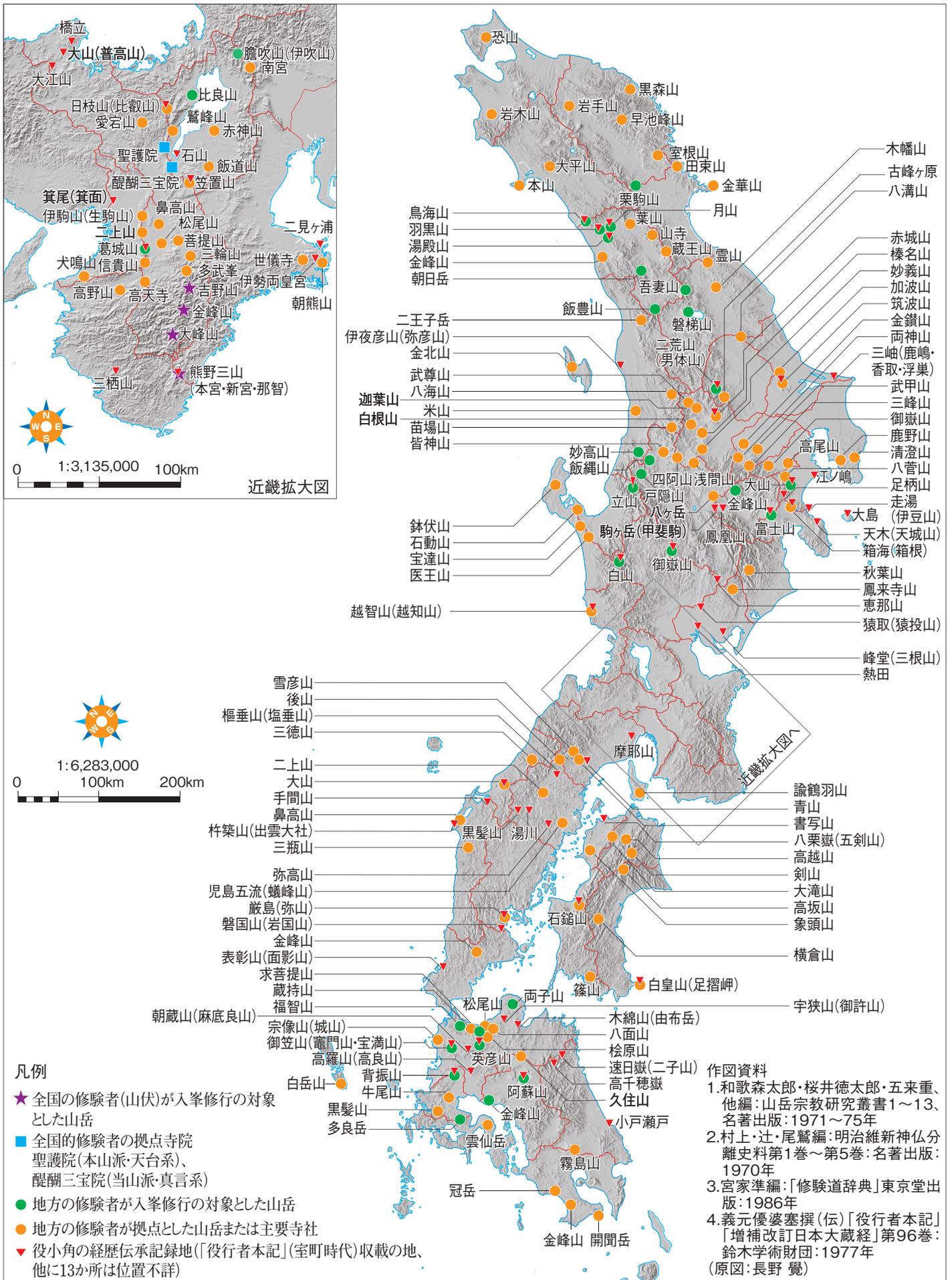


図2 修験霊山・霊所の分布

かれて豊穰を祈る神道儀礼が生まれ、生活の主舞台は平野部に移り、古墳時代(3世紀~7世紀)に日本民族の統一国家が形成される過程で、中国・朝鮮半島から仏教や神仙思想(道教)が伝来しても、古来の山への信仰は根強かった。

例えば奈良・平安時代に都や地方の大寺では、僧侶の中から山に分け入り、塩穀を絶っての山林修行で精霊・神霊を感得したり、仏教思想でも山を天に通じる宇宙軸(須弥山)と考えたり、9世紀に最澄や空海が唐で学んだ密教によって、宇宙統一神といえる大日如来を主尊とする曼荼羅(悟りの世界)を仏像画だけではなく、大自然の山々に求めている。

その山岳曼荼羅では衣食住の俗欲を絶ち、厳しい山岳抖擻(身心修練)により神仏の超能力を修得し(験力・神通力)、衆生の願望に応えようとした修験者(山伏)が山を拠点に活動し始める。そのような修行歴のある空海は高野山に真言宗、最澄は比叡山に天台宗を開基し、それから各地の神体山に山岳寺院が建立され、神と仏が習合した権現(インドの仏が日本で権りに神となって示現する本地垂迹説)を祭る山が多数成

立し、山への信仰を更に高めた。

平安~鎌倉期の院政時代(11世紀~14世紀)に盛んであった熊野詣では、奥深い山にも精通した山伏が先達を務めており、彼ら先達は、大峰山を開いて根本霊場とした役小角(役行者)を祖師と仰ぐ修験道もこの頃には成立した。また熊野権現のルーツは、マカダ国(インド)から中国の天台山に移り、渡海して筑紫の彦山、伊豫の石鎚山、淡路の諭鶴羽山を経て熊野山に鎮座するまで、総て山を経由したことが、公的記録の長寛勘文(1163年)に記されている。

山の宗教の典型である修験道は、自力本願で実力重視の中世に最も多く存在感を示した。山伏の装束は山岳の踏破に極めて合理的な、頭襟(黒色の小頭巾)・篠懸(法衣)・笈(法具入れの背負い箱)・貝緒(ザイル)・法螺貝・金剛杖などの独特のスタイルで目立ちやすい。後世の創作もあるが、源義経一行が武蔵坊弁慶の機転による勸進帳で安宅関を通過するとき、「我々は羽黒山の山伏」と称している。丹波大江山の酒吞童子を源頼光が討伐するとき、「我らは筑紫彦山の客僧(山伏)」と告げている。

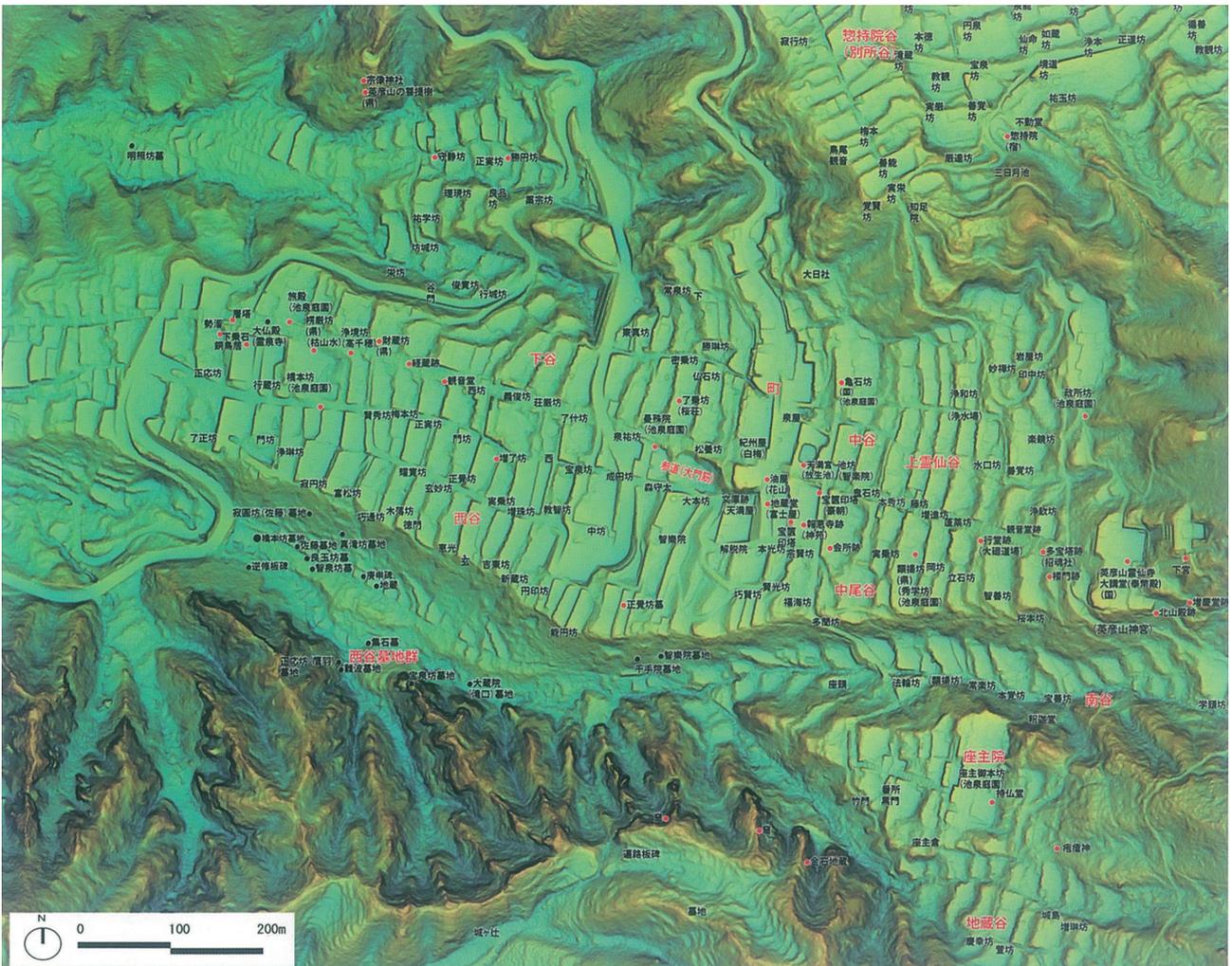


図3 英彦山の修験(山伏)集落遺構(福岡県添田町提供)。レーザー測量により、樹木を取り除き石垣と地肌を再現したもの

奥深い山で修行した修験者(山伏)は、山での靈験を俗人に語ると共に、山の自然に精通して薬草類の知識も豊富であり、加持祈祷や護符ばかりではなく、自家製薬で治病も得意の分野であった。

幕藩体制が安定し、平和の続く江戸時代はことさらに民衆は山へ誘われた。その旅費・宿泊代などは、登拝を目的とした「講」の組織が都市や農村に普及し、お互いの拠出金でまかなわれた。山では山伏たちが待ち受けて山案内を務め、宿坊に泊めて大歓迎したから、当時の世界では類例のない安全で確実な集団による登山ブームが、日本各地の靈山に実現していた(図2)。

およそ以上のような山と宗教の歴史的展望であったが、明治維新政権の神道国教化政策による神仏分離令、明治5(1872)年に神仏習合の修験宗廃止令で修験道の拠点靈山は急激に衰退し、近代登山の時代を迎えた。図3は九州最大の修験道靈山であった英彦山(享保14<1729>年以前は彦山が山名)の山腹を、レーザー測量により山伏たちの屋敷跡を再現したものである。地元の福岡県添田町では、全山を山岳信仰の国指定史



写真1 恐山極楽浜から眺める火口湖の宇曾利湖と外輪山の火口山



写真2 地蔵山を背にした宇曾利山菩提寺本堂(地蔵堂)と塔婆(1984年7月撮影)

跡に申請し、地域活性化の方途を検討している。

3. 山と宗教の現代

日本人の山と宗教の関わりは歴史過程の中で、異なる信仰を受容して共存した共通性がある。しかし個々の山を見れば、位置・地形・地質・気候・生物などの自然条件や、人の関わる人文条件が千差万別であり、山に個性がある。人はその個性に惹かれて登りたくもなる。次の山は筆者が初めて登ったときに見聞したその「山と宗教」の思い出を記した。

(1) 恐山(879m)

—地獄・極楽と亡き人に通じる山—

アイヌ語でウシヨロと呼ばれた周囲8kmの湖畔に、清浄な極楽や硫気を噴出する地獄がある。1984年7月、私は単独で青森県むつ市田名部からバスで恐山に向かった。ブナやヒバの繁る緩やかな勾配の外輪山から、一転して急な湯坂を下ると、静寂な湖面が見え始め、カルデラの中は靈気が漂う。バスの終点から湖畔を進み、

三途川(正津川)の太鼓橋を渡り、山門から壱丁の直線参道で地蔵堂に参拝すると、“父母や夫妻の聲聞きたさに恐山に来てありがたや”と墨書した納額が頭上にあった。

本堂横から塞の河原に行くと、水子地蔵の風車や幼子への人形、亡き人への供物、六道銭であろうか1円玉が露地に積んだ無数の石小積に供えられていた(写真1・2)。地蔵堂の広い境内には四か所の湯治小屋がある。そこでは煩惱も消えて男女のおおらかな混浴だったが、近年は男女別になった。宿坊の一夜は無風と地熱で蒸し暑かったが、他界した祖父と夢で会えたのはイタコ(巫女)に口寄せ(託宣)してもらった御利益だろうか。

恐山の開山伝承は、貞観4(862)年に比叡山の慈覚大師(円仁)とされ、中世に修験や天台・真言僧、近世17世紀から田名部の曹洞宗円通寺の山寺となり現在に至っている。

(2) 出羽三山

—祖霊の往く月山、十界修行を継承する羽黒山、秘所と即身仏の湯殿山—

祖霊の往く月山(1984m)

山形県鶴岡市から夏季に運行する羽黒山經由の月山八合目(弥陀ヶ原)行きバスがある。万年雪のある登山道を上下する白装束の人たち



写真3 月山頂上付近の万年雪と登拝者(1984年7月28日撮影)



写真4 羽黒山上の出羽三山神社と社前の御手洗池



写真5 羽黒山修験本宗の荒澤寺と山伏たち(萱葺の寺内は夜はローソクとランプの薄明かりで勤行する)(1984年8月24日撮影)

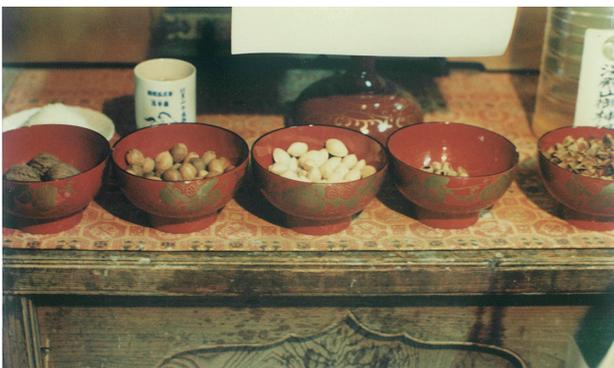


写真6 湯殿山注連寺の即身仏に供えられた木の実類 左からクルミ・カヤ・ギンナン・ハシバミ・ブナ(1989年8月12日撮影)

の中には、九合目の塞ノ河原に亡き人の歯を納めたり、幼児を亡くした親であろうか、人形を背負った人とも出会った。山上の月山神社は天照大神の弟、月読命つよみのみことを祀る延喜式の式内社である。大雪溪(大雪城)では夏スキーを楽しむ人も多く、信仰と観光の共存する月山である(写真3)。

秘行の峰入(入峯)を継承する羽黒山(414m)

この世で生起する六道の地獄(南蛮燻し)・餓鬼(断食)・畜生(水断)・修羅(相撲)・人間(懺悔)・天上(延年)を、()内の修行で成就し即身即仏の境地に達する中世以来の伝統を、天台系の羽黒山修験本宗こうたくじ荒澤寺と出羽三山神社が毎秋実施している。修行の詳細は“親子兄弟たりとも他言禁制”を誓言しての厳しい秘行である。羽黒山の開山は崇峻天皇(6世紀末)の蜂子皇子(能除仙)と伝承される。山上の伊氏波神と月山・湯殿山の神を合祀した出羽三山神社社前の御手洗池からは平安～鎌倉期の古鏡数百面が発見されている(写真4・5)。

湯殿山(1500m)の秘所と即身仏

月山から急坂を下った仙人沢には、芭蕉が「奥の細道」で、“語られぬ湯殿に濡す袂かな”と詠んだ秘所がある。それは溪谷の中に熱湯が溢出する巨岩の陽塔と陰形の湯溜まりがセットで並び、生命の根源を象徴する自然の造形を御神体とし、今も写真撮影を禁じている。登山口の真言系の注連寺ちゅうれんじや大日坊等では、断食入定じゅうじょうして即身仏となった修験者のお姿を拝観する参詣人が多い(写真6)。

(3) 富士山(3776m)

一五合目で下乗する秀麗・威厳の山一

山梨県富士吉田市の富士スバルラインでバスの終点の五合目から、私は好天気の中を六根清浄ろっこんしょうじょうで七合目山小屋に辿り着くと、たちまち大嵐となった。しかし山小屋主の予測通り翌早暁から晴れて、御来迎と登頂が叶った。それにしても総ての登山車道が五合目でストップしている理由は、車道建設費や建設技術の問題ではない。それは古くから、山体の五合目を一巡する回峰行(峰入)の御中道おちゅうどうがあり、これを天地別てんちわかれと称し、それから上は聖なる天上界であり、下乗して自分の足で登ることを主張した富士山御師や行人の信仰を尊重したとのことである。

秀麗な富士山の主神は木花咲耶姫このはなさくやひめが式内社の浅間大社・神社として登山口に祀られ、山頂は静岡県富士宮市の浅間大社の奥宮となっている。山名の富士は不尽・不死・蓬莱などの神仙境にも相定された。密教思

想から八合目以上は大日如来の八葉蓮華の座とし、山頂火口壁の文殊岳(三島岳)・釈迦岳(白山岳)・観音岳(伊豆岳)・経ヶ岳(成就岳)・大日堂(浅間奥宮)の仏菩薩名は、明治維新の廃仏毀釈で()内の山名に変更された。修験道では役小角の入山伝承や平安末期に末代が山頂に大日寺を建て、山麓の村山を富士修験の拠点とした。元和6(1620)年に江戸で流行の奇病を治癒した長谷川角行、享保18(1733)年に七合目の烏帽子岩で断食し入定した食行身緑じきぎょうみろくなどの修

験者に人心は惹かれ、富士登拝を目的とした富士講や、江戸市中に築いた富士塚とその祭りは現在も継承されている。富士山は文芸の主題ともなり、古代から現代まで日本人の心を捉えた聖山である(写真7・8)。

後編の立山、木曾御嶽山、大峰山、比叡山・高野山、伯耆大山、石鎚山、英彦山の各霊山については、次号に掲載予定です。お楽しみに(編集部)。



写真7 静岡県富士宮からの表口登山車道(現地絵葉書使用)

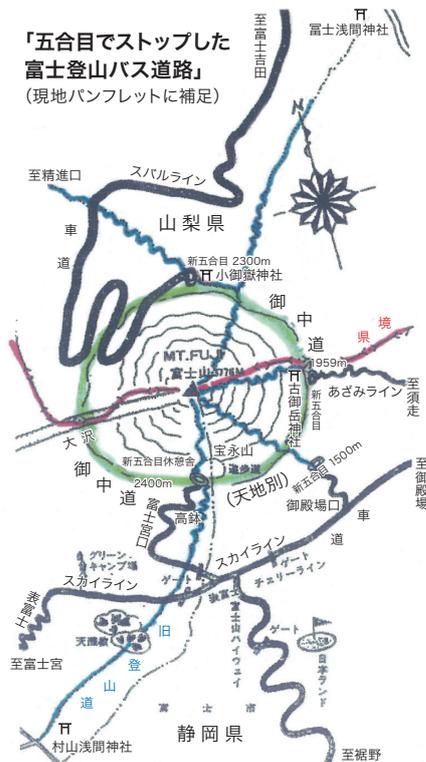


図4 総ての登山車道は五合目(天地別)で停止している



写真8 「富士山北口女人登山之図」(部分) 万延元(1860)年庚申の版画に記されている「天地別」、『日本の心 富士の美展』図録(1998年)NHK名古屋放送局による